『ジャズ・シンガー』にはダディ・イシューが描かれる。
写真＝Alamy /amanaimages

「父を乗り越える物語」はなぜ繰り返されるのか

町山智浩（映画評論家）

ミュージシャンの伝記映画には、なぜか似た物語が繰り返される。父との確執、栄光、転落、そして再生――。『Michael／マイケル』を起点に、その100年の歴史と“型破り”な異端作までを一気にたどる。

映画『Michael／マイケル』は、予想どおりアメリカで大ヒットになった。マイケル・ジャクソンの家族のプロデュースによるオフィシャル映画で、父親ジョセフの操り人形だったマイケルがそこから脱出するまでの物語だ。

ジャクソン兄弟は幼い頃から父にバンドを組まされ、朝から晩までステージで働かされる。少しでも逆らえばベルトで鞭打つ折檻（せっかん）が待っている。最も才能に恵まれたマイケルは学校にも行けず、同年齢の子どもとも接することがなく、四六時中監視されて大人へと成長する機会も奪われ、20歳を過ぎてもチンパンジーのバブルスくんだけが友達。しかし、マイケルはソロ活動で父への反逆を始める……。

どれもこれも、この映画に足を運んだ観客なら誰でも知ってることばかり。目新しい事実はない。ここでは、ミュージシャンの伝記映画の歴史において革命的な作品をいくつか紹介していくつもりだが、それらに比べると『マイケル』はあまりに定型どおりだ。

“父”に縛られる天才たちの物語

ミュージシャンの伝記映画の始まりは『ジャズ・シンガー』（1927年）だとされる。これは世界初のトーキー（声が出る）映画でもある。厳密には「伝記」ではなく、当時人気だったジャズ歌手アル・ジョルスンの実人生をモデルにした小説の映画化にジョルスン本人が主演したという、ややこしい映画だが。これがその後100年のミュージシャン伝記映画の定型を確立した。

アル・ジョルスン扮するジェイキーは、東欧からニューヨークに渡って来たユダヤ系移民で、代々続くカンター（ユダヤ教の聖歌隊の先唱者）の家柄。父からは後を継ぐことを期待されるが、ジェイキーは当時流行し始めた黒人音楽、ジャズに夢中になり、13歳でこっそりクラブに歌手として出演し始める。

「神が与えた声を汚すな！」

厳格な父から鞭（むち）で打たれたジェイキーは家出し、歌手を目指して苦労する。

『ジャズ・シンガー』と『マイケル』には、父からの鞭打ちだけでなく、支配的な父との葛藤、独立というテーマ全体が共通している。このダディ・イシュー（父親問題）はミュージシャン伝記映画につきもので、ビーチ・ボーイズのブライアン・ウィルソンの『ラブ&マーシー　終わらないメロディー』（2015年）や、アレサ・フランクリン『リスペクト』（2021年）、ロビー・ウィリアムズの『BETTER MAN／ベター・マン』（2024年）、『スプリングスティーン 孤独のハイウェイ』（2025年）など、数限りない。

『ジャズ・シンガー』のジェイキーはついにブロードウェイの舞台に抜擢される。ところが公演初日の直前、父が病に倒れる。葛藤の末、ジェイキーは実家に帰り、ベッドに横たわる父の傍らにひざまずき二人は和解する。礼拝で父の代わりにジェイキーが聖歌を歌い、それを聴きながら父は幸福そうに神に召される。

最後は満員の劇場でステージに立ったジェイキーは客席の最前列の母親を見つめて「マイ・マミー（おふくろさん）」を歌う。ずっと彼を支え続けた母に捧げるバラードだ。

『マイケル』のマイケルと母の関係もそうだったし、最近のミュージシャン伝記映画ブームのきっかけになった『ボヘミアン・ラプソディ』（2018年）のフレディ・マーキュリーも最後にステージから母に「ママ」と歌いかけた。

定型どおりの『マイケル』だが、アメリカの観客は熱狂していた。おなじみのヒットソングが流れるとみんな思わず体を揺らす。マイケル役の生声と、それを演じる甥（おい）のジャファーの声がミックスされ、亡き叔父のステージ・パフォーマンスを何年もかけてミリ単位でコピーした渾身のダンス、それを通して体感するマイケル・ジャクソンの天才性に、客席から自然に拍手喝采が沸き起こった。

『ジャズ・シンガー』もそうだった。当時、満員の観客はスクリーンの中で歌って踊るアル・ジョルスンにスタンディング・オベーションをしたという。『ジャズ・シンガー』は空前の大ヒットになり、トーキーという映画の革命が起こった。

『ジャズ・シンガー』は、ユダヤ系というエスニシティを前面に出した点でも革命的だった。当時、ハリウッドでは作り手も俳優も多くがユダヤ系だったが、映画の登場人物は民族的な背景不明のジェネリックな白人として描かれていたからだ。

そのいっぽうで『ジャズ・シンガー』は「レイシストの映画」として悪名も高い。アル・ジョルスンがステージで顔を黒く塗って黒人を演じていたり、白人が南部の黒人奴隷に扮して歌って踊る「ミンストレル・ショー」に出演していたからだ。逆にマイケル・ジャクソンはその容貌が段階的に白人に近づいていった。『マイケル』では父が彼を「デカ鼻」と呼んでコンプレックスを植え付けたことや、尋常性白斑が出始

この続きは本誌でどうぞ！